

矢上の大クスの歴史

佐藤 征弥

1. はじめに

徳島県藍住町矢上の春日神社に、矢上の大クスと呼ばれているクスノキがある。幹の周囲が約 13 m になる巨樹であり、徳島県の天然記念物に指定されている。樹の根元には人が入れる空洞があいており、中は黒化していて火災で生じた空洞であることが分かる。また、幹は所々で折れたり人為的に切断されていて、痛々しい姿である。しかし、瀕死の状態に至っている訳ではなく、所々から若い枝が伸び葉を茂らせている。この樹の中心部の傷んだ姿と末端部の健康的な姿のコントラストが、見る者に強烈な印象を与える樹である。

この樹については江戸時代の文化年代に描かれた絵¹⁾が残っており、また大正時代の写真²⁾も残されていて、それらを見ると樹は現在の姿とは異なる堂々とした姿である。江戸時代の絵と大正期の写真は、樹をほぼ同じ向きから描写しており、樹の歴史を知る素晴らしい資料である。両者には百年以上の年代の隔りがあるが、驚くべきことに樹の特徴はあまり変わっていない。ところが、それらと比べると現在の樹の姿は倒木や枝の伐採により樹自体が半分位に小さくなり、昔の面影がどこに残っているのかよく調べないと分からないくらいその姿が大きく変わってしまった。いったいこの樹に何が起きたのだろうか。

調べていくうちに、この樹に関する史料は多く見つかったが、それらを分析し、まとめた文献がないことが分かった。その結果として、誤った記述が後々まで引用されていたり、大変貴重で面白い史料であっても、これまで引用されることなく埋もれてしまっていたものがあることに気づいた。そこで本論文は、史料を網羅的に紹介するとともに分析を加え、樹の辿った歴史や伝説等を検証することを試みた。また、先に挙げた江戸時代の絵図、大正時代の写真、そして現代の樹の姿が具体的にどう変化したのか目に見える形で比較することも試みた。これらの時代はそれぞれ 19 世紀、20 世紀、21 世紀の初めにあたり、一世紀毎に樹の姿の変化を記録し相互に比較することに、他に類をみない生物的、歴史的価値があると思う。

2. 現在の姿

図 1 は矢上の大クスのある春日神社の境内図である。境内には天神社、弁財天も祀られている。春日神社の鎮座については『日本歴史地名体系第三七巻 徳島県の地名』³⁾によると創建年代未詳としながら

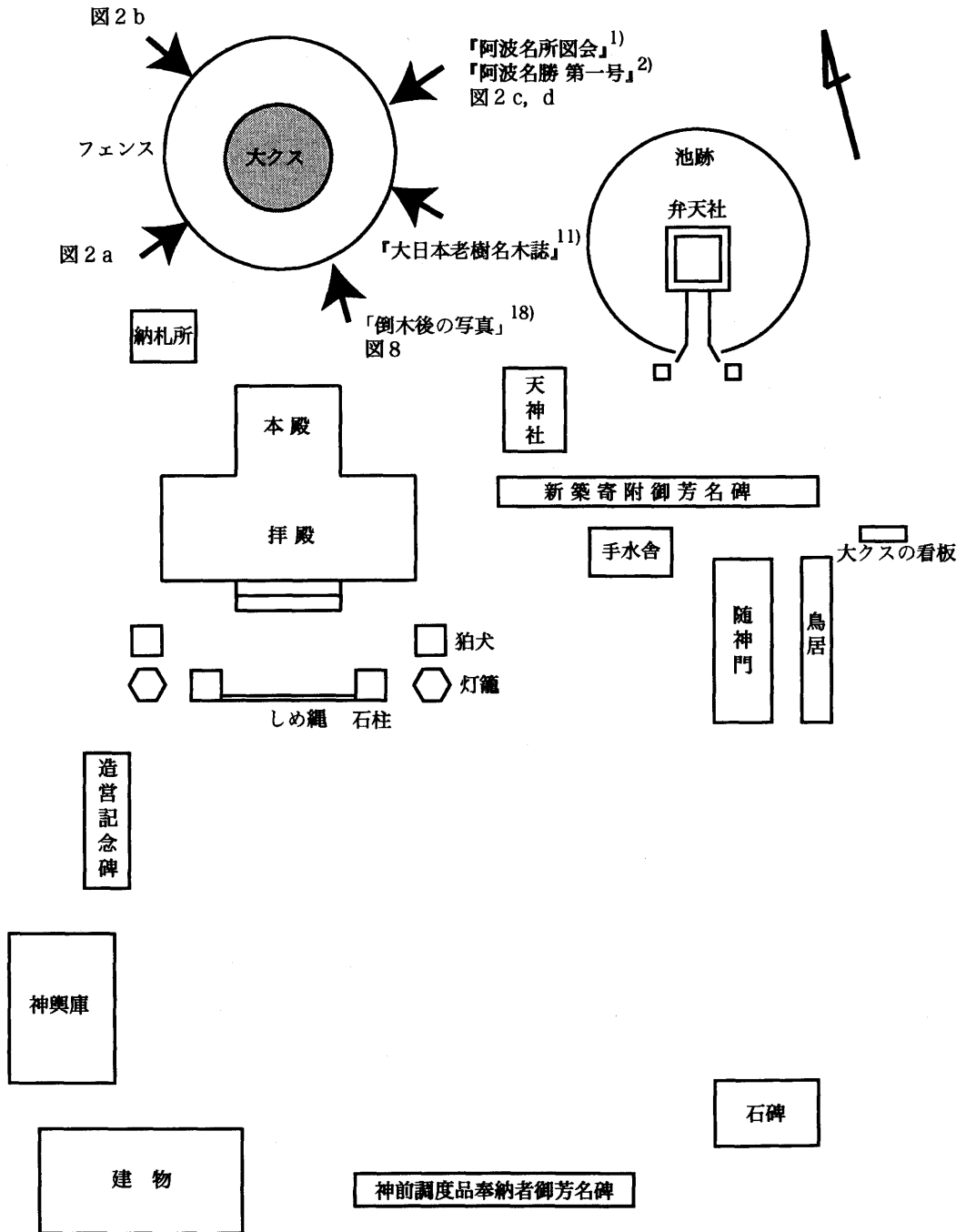


図 1 春日神社境内図

大クスは本殿裏（北側）に位置する。図中における樹の周りの矢印は、本調査や史料の写真や絵が樹を描写した向きを示す。

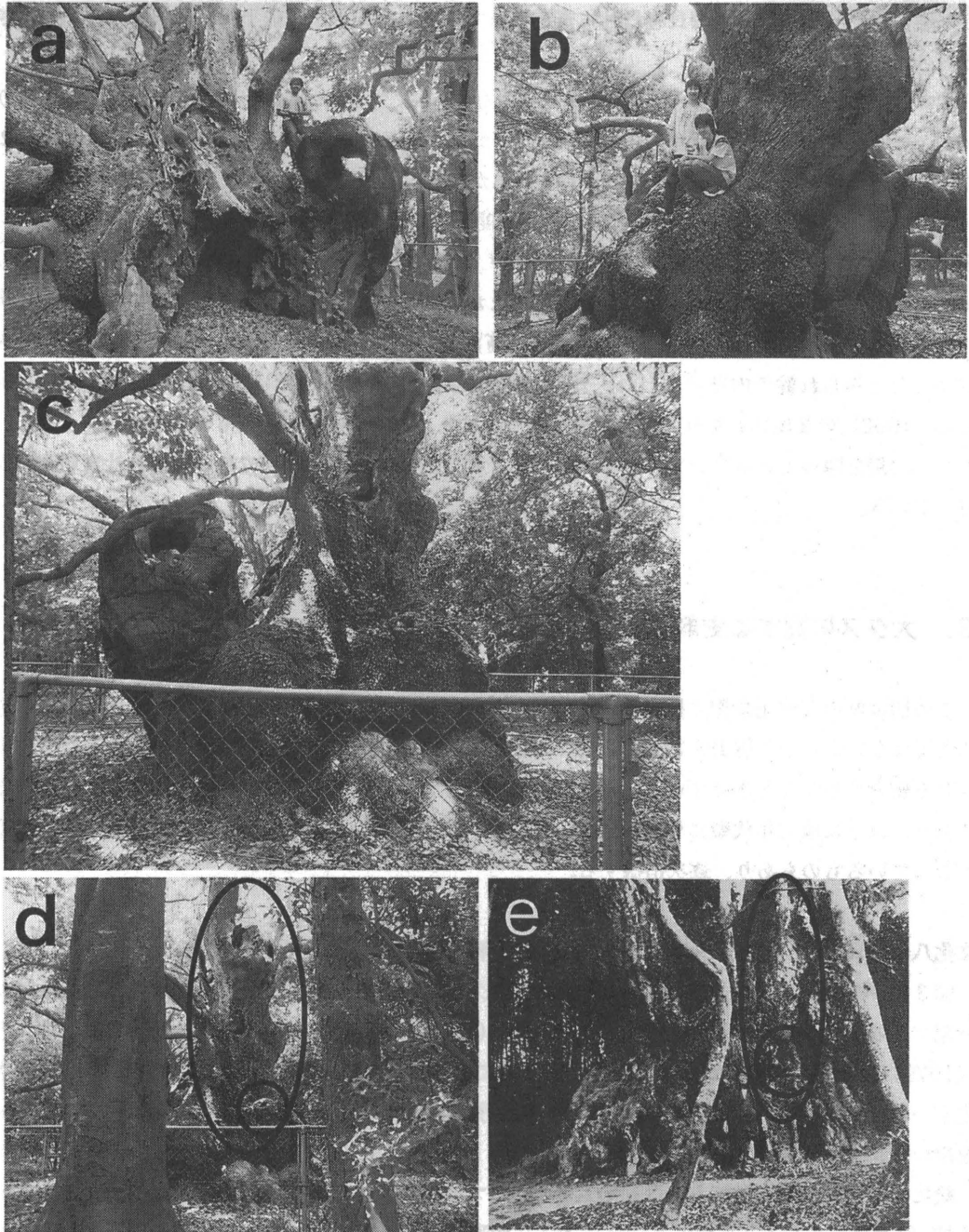


図2 矢上の大クスの現在の姿

aは平成十七年（2005）6月29日に、b～dは平成十七年（2005）7月13日に撮影した。撮影した角度は図1に示す。cとdは同一角度から距離を変えて撮影したもので、『阿波名所図会』¹⁾や『阿波名勝 第一号』²⁾と対応すると思われる。eは『阿波名勝 第一号』²⁾の写真であり、大きな楕円で示した幹の特徴がdと一致する。内側の円で示した幹の穴は、現在ではかなり塞がっていることが分かる。また、大クスの手前の2本の木も同一ではないかと思われる。尚、撮影にあたっては管理者の春日神社宮司森内氏にフェンス内での撮影許可を得た。

も「建仁三年（一二〇三）奈良春日社に寄進されて成立した矢上庄（矢上保）に鎮守として勧請されたとみられる。」とある。

図2に樹の現在の姿を示す（eのみは大正期の写真）。大クスは本殿の裏に立っていて、樹の周りはフェンスで囲われている。樹のサイズは地上150 cmにおける幹周囲が12.9 m、最高部の高さは12.7 mである。また、枯れてしまって途中で折れているが、主幹の最高部の高さは9.60 mである。

樹の南面（本殿側）の根元には、大きな洞穴が開いている。洞穴の開口部は逆Vの字状になっており、最も広がっている地表部の幅が135 cm、高さが150 cmとなっている。洞穴の中は黒化しており、火災により内部が燃えたことにより空洞化したことが分かる。また、洞穴の上部は開口していて煙突状になっている。洞穴に向かって右側（東側）には高さ3 m位の大きな幹が残っているが、やはり火災で被災したとみられ幹の内部は失われ、外形だけが残っている。この樹は明治二八年（1895）と昭和三十七年（1962）の2度にわたり大きな火災にあっており、焼け跡はその時のものであろう。

なお、樹を囲っているフェンスには鍵が付いており、鍵は樹の管理者である春日神社宮司森内氏が所持している。

3. 大クスに関する史料

この樹は県の天然記念物に指定されており、この樹に関する比較的最近の資料を見つけるのは難しいことではない。しかし過去を遡って数多くの史料を紹介したものはなく、引用文献を記したものでも2～3を紹介するにとどまっている。本研究の目的の1つは、それらをできる限り蒐集して整理することであり、以下に成立年代順に挙げていき、大クスに関する部分を抜粋する。中には相互に矛盾する内容となっているものもあり、逐次指摘する。

文化八年（1811）、文化十一年（1814）、弘化三年（1846） 『阿波名所図会』¹⁾

図3は『阿波名所図会』¹⁾に描かれた矢上の大クスの絵である。本書は著者が阿波の名所を訪ねた旅行記である。文化八年（1811）版、文化十一年（1814）版、弘化三年（1846）版があり、昭和五四年（1979）には歴史図書社から活字版が刊行されている。徳島大学図書館には文化八年（1811）版、文化十一年（1814）版、昭和五四年（1979）版が所蔵されており、図3の写真は文化十一年（1814）版を用いた。

絵には樹の周りを人が腕を伸ばして太さを測っている様子が描かれている。右上には「矢上（やかみ）の楠（くす）」とタイトルがあり、その下に「板野郡（いたのこおり）矢上村尒あり 太（ふと）さ十五囲（かゝへ）」とある。また、絵の左側には「浪花亀雄 涼しさや 石になる迄 楠の陰」という句が添えられている。太さ十五囲ということは15人が手を伸ばしてやっと一周する太さということになるが、この絵では腕を伸ばして樹を測っている姿が見えている者は3人であり（そのうちの一人は子供）、とても15人が抱える太さには描かれていない。しかし、文化九年（1812）の『燈下録』⁴⁾においても「めぐり十五把」と記されていること、さらに文化十二年（1815）の『阿波志』⁵⁾には周囲が六丈余（約18 m）、大正三年（1914）の県山林会の調査^{6), 7)}でも地上五尺の周囲は五丈七尺（約17 m）と

あり、この数値ならば手をつないで一周するのに大人 10 人以上が必要であり、「十五囲」というのはそれほど大きな誇張ではない。とすれば絵の中で手を伸ばして樹を測っている人数が少ないのは、作者が実際の縮尺よりも絵としての構図を優先したためだと思われる。同様に、女性に抱きかかえられた子供が樹に手を回している様子が描かれていたり、別の人物が腕を回して足りない部分に扇子をあてがっている様子が描かれているのも、現実にはこのようば場面を写したのではなく、読者を楽しませようと意図して描いたものではないだろうか。

なお、この本の著者は昭和五四年（1979）発行の活字版では探古堂墨海とされているが、赤松らによる『『阿波名所図会』の研究』⁸⁾では探古室墨海としている。

文化九年（1812） 「燈下録」⁴⁾

本書は著者の元木維然が阿波の風物を記したものであり、序文には文化九年（1812）に浄書したことが記されている。本書は昭和五一年（1976）発行の『新編阿波叢書』⁹⁾に収められており、本論文はそれを参考とした。

本書の「寿樹」の項にこの樹について記述されており、

「住吉村春日社に（地名を春日と云）生る老楠枝幹扶疎てめぐり十五把あり、千年とも二千年とも考る所なしめつらしき大木なり。」

とある。短い記述であるがその内容は、幹周囲は 15 人で手をつないで一周する大きさであること、樹齢は見当もつかない位古いだろうということが書かれている。幹周囲を 15 かかえと表現しているのは先の『阿波名所図会』¹⁾と一致している。15 かかえという表現がこの樹の評判として一般に浸透していたのかもしれない。

文化十二年（1815） 「阿波志 卷之五」⁴⁾

藩撰の地誌『阿波志』⁴⁾の第五卷には板野郡の「春日祠」の条に

「有豫章圃六丈餘分為三幹枝葉翳鬱」

とある。豫章とはクスノキのことで、幹周囲は六丈余（18 m 位）、幹は 3 つに分かれ、枝葉が翳鬱と茂っているとその様子が記されている。

安政三年（1856） 「粟の落穂」¹⁰⁾

本書は阿波藩の国学者である野口年長が阿波の地理や風物を記した書である。『燈下録』⁴⁾と同様に昭和五一年（1976）発行の『新編阿波叢書』⁹⁾に収められており、本論文はそれを参考とした。

本書の第一巻「春日部ノ屯倉」の項に大クスについてかなり詳しく記されているが、この部分が後々大きな問題を引き起こすことになる。というのは大正三年（1914）に発行された『徳島県老樹名木誌』⁹⁾では、本書を誤って解釈して引用し、その間違いが流布してしまったのである。さらに『徳島県老樹名木誌』⁹⁾では引用部分が本書であることを書いておらず、一方で元となった本書は忘れ去られてしまったため、本書は正しく引用されることなく現在に至っている。ここで、本論文ではそれを正しておくことにする。まず、本書『栗の落穂』で大クスについて記されている箇所を以下に記す。

「春日部ノ屯倉

日本書紀 安閑天皇の御巻に云、二年五月丙午朔甲寅置_レ阿波国春日部屯倉云云、この屯倉何所ともしるべからずといへど、板野郡に春日といふ地ありて、そこに春日明神を祀れり、又社のあたりに楠の木のみくり十二三間許なる大木あり

これ若屯倉ありし所なりしを春日部といふによりて、春日明神を祭りたるならむか、其のほとりに抛もなけれど、古き楠木かこれかれあれど、かゝる大木は此の御国うちにあることなし、いかさまにもゆゑある古き地なるべし、また此のあたりの地名を春日といふも、春日明神の坐すにとりていひ出し地名にもあらで、ふるくよりいへる地名なるべし、八幡宮本紀に云、御産所の側に生茂れる楠あり、其の下にて産湯をめさせ給ふ、しかるに其の木大に繁茂し、枝葉ことにうるはし、後人これを名付けて湯蓋の森と云（此の楠今にあり其の周七畝余）云々、この筑前の楠さへも貝原氏は大なるさまにいはれたれど、春日の楠木にみくらべては大に劣れり」

これによると「かゝる大木は此の御国うちにあることなし」という記述や、『八幡宮本紀』に登場する筑前の「湯蓋の森」と呼ばれるクスノキを「春日の楠にみくらべては大に劣れり」と記述しているなど、矢上の大クスの巨大さを強調した内容となっている。ただし、大クスの大きさを「めくり十二三間許」としているが、換算すると 22～24 m になり、上で紹介してきた値（17～18 m）よりかなり大きいので、これについては誇張した数値ではないかと思われる。

「めくり十二三間許」や「かゝる大木は此の御国うちにあることなし」と書かれた部分は著者である野口年長の文章であるが、後で述べる『徳島県老樹名木誌』⁹⁾では、この部分も日本書紀に書かれていると受け取られるような書き方をしている。また同書では、筑前の「湯蓋の森」と春日神社の大クスを同じ樹であるとする大きな間違いをしている。これについては後でまた触れることにする。なお、大クスとは関係ないが、『日本書紀』の引用部分である「安閑天皇の御巻に云、二年五月丙午朔甲寅置_レ阿波国春日部屯倉」について、著者は「春日部屯倉」の場所を「この屯倉何所ともしるべからずといへど」と断りつつも、この場所（藍住町春日）であろうと考えているから紹介したと思われる。しかし、これについては現在の羽ノ浦町宮倉であるとする異説もある。

大正二年（1913） 『大日本老樹名木誌』¹¹⁾ 『大日本老樹番附』¹²⁾

大日本山林会発行の『大日本老樹名木誌』¹¹⁾は東京農科大学の本多静六博士が日本（台湾と朝鮮半島も含む）の巨樹の調査記録をまとめたもので、紹介されている樹が1500本という労作である。

矢上の大クスについては次のように記されている。

「矢上の大樟

所在地 徳島県板野郡住吉村矢上

地上五尺ノ周囲 四丈五尺

樹高 十間

樹齡 不詳

伝説 県下ノ最大樹ト称セラル幹ニ空洞アリ二十人ヲ容ルヽニ足ル

伝説ナシ」

幹周囲は『阿波志』⁵⁾に六丈余と記されているのと比べてかなり小さな値である。後でも述べるが、大正期の他の調査^{2), 6), 7)}では五丈六尺や五十七尺となっているので、本書で四丈五尺としているのは間違いであろう。

本書は、幹に大きな空洞があることが触れられている最初の史料である。『阿波名所図会』¹⁾にも正面に空洞があるように描かれているが（図3）、後の史料にあるように明治期の火災でさらに広がったとみられる。

また、本書には大クスの写真も掲載されている（図4）。撮影した角度は『阿波名所図会』¹⁾や後述の『阿波名勝 第一号』²⁾とは異なっているが、樹の右側に上下に並んだコブが共通の特徴として見てとれる（図7）。右側のコブの他に、樹の左にも大きなコブがあることが分かる。しかし、このコブのある左側の大きな幹は、後で述べるが昭和四三年（1968）の台風で倒れてしまい、現在は残っていない。

なお、本書には矢上の大クスの他に徳島県の巨樹が6本記されていて、その中の1つ上板町瀬部の乳保神社のイチョウの記述の中に、矢上の大クスにも触れられている箇所があり、

「本樹ハ往古ヨリ板野郡矢上ノ大樟ト共ニ並ビ称セラレタル大樹ニシテ昔時ハ此公孫樹

ト矢上ノ大樟トノ梢ニ旗ヲ立テ公事ノ境及ビ種々ノ目標トシタルモノナリ」

と記されている。樹の梢に旗を立てて目印とするという内容は、乳保神社のイチョウに関する文献では引用されているものがあるが、矢上の大クスについて記した文献には出てこない。後で紹介するが、大正三年（1914）に作られた「徳島県老樹名木番附」⁷⁾において矢上の大クスが東の横綱に、乳保神社のイチョウが西の横綱となっていて、共に県下において（全国的にも）有名な樹である。また、両者の距離は直線距離にして約 9.5 km であり、そう離れている訳ではないので、一方で伝わっている話がある一方に伝わっていないことは不思議な気がするが、春日神社でも乳保神社でも災害等により古い記録が逸失してしまっていることにその理由があるかもしれない。ともあれ、ここに書かれていることが真実であると仮定して、梢に旗を立てて公事の境及び種々の目標としたというのは、具体的に何を指すのであろうか。巨樹が地域の境界となっていることはままたち、一例として阿波市大影にある徳島県と香川

県の県境に位置するイチョウの大木はその名も「境目のイチョウ」と呼ばれている。想像であるが、矢上の大クスも乳保神社のイチョウも、吉野川が氾濫して土地の区画が分からなくなった場合の目印にしたのではないだろうか。これについては、今後さらに調査を行って検討していきたい。

『大日本老樹番附』¹²⁾は『大日本老樹名木誌』¹¹⁾と同時期に発行され、『大日本老樹名木誌』¹¹⁾の中から特に目立つ樹を選んで相撲の番付風に並べた大変面白いものである。矢上の大クスは東の前頭 14 枚目にその名が見える(図 5 a、b)。この番付や『大日本老樹名木誌』¹¹⁾には、現在の目から見れば当然載るべき樹が載ってなかったり、番付の位置も首をかしげたくなるものがあったりするが、この当時に大々的な調査を行い、まとめあげたことは称賛される。なお、この番付は、本多博士の出身地である埼玉県菖蒲町の教育委員会が復刻しており、無償で入手することができる。図 5 の写真も復刻版を用いている。

大正三年(1914) 『徳島県老樹名木誌』⁶⁾ 『徳島県老樹名木番附』⁷⁾

『徳島県老樹名木誌』⁶⁾と『徳島県老樹名木番附』⁷⁾(図 5 c、d)は徳島県山林会がともに大正三年(1914)三月に発行したもので、先に紹介した『大日本老樹名木誌』¹¹⁾や『大日本老樹番附』¹²⁾のいわば徳島県版である。全国版のわずか数ヶ月後に発行されていること、そして『大日本老樹名木誌』¹¹⁾は大日本山林会が、『徳島県老樹名木誌』⁶⁾と『徳島県老樹名木番附』⁷⁾は徳島県山林会が発行しており、どちらも山林会が製作したものであることから、全国版と徳島県版は協同して調査・編集作業を進めていたと考えられる。

番付を見ると、矢上の大クスは全国版では東の前頭 14 枚目であったが、徳島県版では東の横綱となっている。現在同じものを作るとしたら、被災して小さくなってしまったこの樹に代わって、加茂の大クスが横綱として相応しいだろう。矢上の大クスは行司とするのが適切かもしれない。

全国版と徳島県版との関連について述べたが、興味深いことに両者には樹の説明にくい違う点が見られる。以下に『徳島県老樹名木誌』⁶⁾における矢上の大クスの部分を紹介する。

「一、矢上の大楠

所在地 板野郡住吉村大字矢上村字春日 春日神社境内

地上五尺の周囲 五十七尺

樹高 十五間

樹齡 二千年

伝説 日本書記(原文ママ)安閑天皇の御巻に曰く板野郡矢上村に春日と云地ありて其所に春日大明神を祀れり又社の辺に樟樹の回り十二三間許りなる大木あり「中略」古き樟木は是彼有れどかかる大木は此御国内に有る所なし云々

八幡本記(佐藤註:正しくは『八幡宮本紀』)に曰く御産所の側に生ひ茂れる樟あり其下にて産湯を召させ給ふ然るに其木大に繁茂し枝葉殊に美麗後人は是を名付けて湯蓋の森と云ふ此樟今に存せり其周囲十二間餘云々

とあり往古より大木として伝えられたるを知る可し

本樹は幹の下部に大空洞を有し其空洞高さ三間周囲七間あり数拾人を入れるに足る東及西に外部に通ずるの穴あり体を屈せば能く洞内に出入し得明治二十八年十月不明の火を発し午後七時より翌朝八時頃まで燃焼せりと云ふ空洞は即ち其火災によりて生ぜるものなり本樹は実に県下の最大、最老の老大木にして日本に在りても又屈指の巨木なりとす

『大日本老樹名木誌』¹¹⁾の記述と比べると、周囲については四丈五尺が五十七尺に、樹高については十間が十五間と『徳島県老樹名木誌』⁶⁾の方がともかなり大きな数値となっている。後で述べる大正期や昭和初期の他の調査では幹周囲は五丈六尺あるいは五十七尺としているので、幹周囲は『徳島県老樹名木誌』⁶⁾が正しい数値であろう。高さは九間とする調査と十四～十五間とする調査があり、どちらが正しいか分からない。また、樹齢は『大日本老樹名木誌』¹¹⁾では不詳となっているが、『徳島県老樹名木誌』⁶⁾では二千年としている。二千年とした根拠は本文中の伝説の所で引用している『日本書紀』や『八幡宮本記』からの推論したものであろう。ところが、この部分は先に紹介した阿波藩の地誌『粟の落穂』¹⁰⁾を間違って解釈して載せたと考えられるのである。例えば、「社の辺に樟樹の回り十二三間許りなる大木あり」や「古き樟木は是彼有れどかかる大木は此御国内に有る所なし」という表現は『粟の落穂』¹⁰⁾は著者である野口年長が自分で書いた文章であるが、ここでは『日本書紀』に書かれているように読める。実際のところ『日本書紀』にはこのような文章は存在しない。また、『八幡宮本記』に書かれているとする「湯蓋の森」というのは福岡県の宇美八幡宮のクスノキのことであり、矢上の大クスとは別の木である。『粟の落穂』¹⁰⁾では「湯蓋の森」を紹介したうえで矢上の大クスと比較しているのだが、本書では後半部分を省略しており、両者が同一の樹である錯覚していると思われる。

これら『日本書紀』と『八幡宮本記』の引用が誤りであることは、後で述べる『阿波名勝 第一号』²⁾においても指摘されている。しかし、その『阿波名勝 第一号』²⁾や元々の出典である『粟の落穂』¹⁰⁾はその後引用されることなく、逆に本書の方がその後引用され続けたのは残念なことである。

大正五年(1916) 『阿波名勝案内』¹⁹⁾

本書は著者の石毛賢之助が徳島の名所、旧蹟、神社仏閣、地名、人物、伝説、山川、文化財、物産などについて資料を蒐集し、また自ら実地に調査し編集した郷土史事典である。明治四一年(1908)版、大正五年(1916)版、昭和五四年(1979)版とあり、大正五年(1916)版は明治四一年(1908)版を全面的に改め増補改訂したものであり、昭和五四年(1979)版はそれを歴史図書社が再刊したものである。これらはいずれも徳島県立図書館所蔵のものを閲覧した。矢上の大クスに関する記述は明治四一年(1908)版では見られず、大正五年(1916)版に入っている。

大クスに関する部分を以下に引用する。

「住吉村矢上字春日春日神社境内にあり、周囲五十七尺樹高十五間樹齢二千年と算せらる、日本書紀安閑天皇の御巻に曰「板野郡矢上村に春日といふ地ありて其所に春日明神を祀れり又社の辺に樟樹あり回り十二三間許なる大木あり(中略)古き樟木は是彼あれ

どかゝる大木は此御国内に有る所なし」云々とあり、往古より大木として伝えられたるを知るべし、本樹は下部に大空洞を有し、其空洞高さ三間周囲七間あり、数十人を容るゝに足る、東西に外部に通ずる穴あり、体を屈すれば能く洞内に入し得べし、明治廿八年十月不明の火を發し午後七時より翌朝八時頃まで燃焼せり、空洞は即其火災によりて生せるもの、本樹は実に県下に於て最大最老の誇を專にするのみならず、日本に於ても有数の巨木たるを失はず。」

ここに記されている内容は、『徳島県老樹名木誌』⁹⁾とそっくりであり、冒頭と最後以外は同一と言って良い。これは著者が『徳島県老樹名木誌』⁹⁾を見て、それを写したものであろう。『八幡宮本記』の部分が省かれているのは「湯蓋の森」がこの樹ではないことを知っていたためか。

大正十一年(1922) 「阿波名勝 第一号」²⁾

本書は阿波名勝会が編集・発行した雑誌である。矢上の大クスについては会の代表者である笠井高三郎が記したと考えられる。笠井高三郎は後に笠井藍水というペンネームで郷土誌関係の著作を多く残している。

本書では矢上の大クスについて素晴らしい写真(図6)とともに、文章による丁寧な解説がある。非常に興味深い内容なので、長くなるが以下に全文を引用する。

「県下の最大老樹 矢上の大樟」

近時一般に普及して来た天然記念物と言ふは、結局自然界の名勝を意味するので、具体的に言へば老樹名木、珍奇なる動植物、奇状をなした岩石、立派なる風景等である。偕て天然記念物の最も卑近で趣味の深いのは大木の類である、他の天然記念物は殆んど皆空間的に価値あるものであるが、独り大木に至っては其年代が連想されるので、日本人の得意とする歴史的趣味が加はるから感興が特に深いのである、県下の最大古木として古来人口に膾炙(くわいしゃ)して居るのは矢上の大樟である、此樟は板野郡住吉村矢上の春日神社境内にあって幹の周囲五丈六尺と言ふ途方もない巨大なものである、文化年間出版の阿波名所図絵に此樹も図説してあって太さ十五間とある、一体昔の郷土学者は頭脳が粗雑であるのみならず国自慢観念等から誇張性に富んで居ったから、数字の事などは少しも宛にならぬので十五抱と言ふは少々法螺である、一抱五尺とすれば十一抱位とならねばならぬ、其写生図なども理窟(原文ママ)的に見られるものではないけれども、大きな瘤のある点、根元に段々穴がある点などが見受けられるから百年位前でも今日の状態と餘り変わらぬやうである、

此樹の下部は目通の周囲五丈六尺と言ふ尠大なものであるが、地上一丈位の處から三叉して遂に細い幹となって居る、各幹の直径は五、六尺位に過ぎぬ、樹木の最高点は高さ九間位である、樟は幹の太くなる割合に高くならぬもので、日本で最高のもので二十間位に過ぎぬと言はれて居る、根元に於ける平面的の形状は稍々精円形をして居って

東西の長径が一丈三尺位、南北の長径が一丈八尺位である、是は三本に分岐した樹幹が南北の線上に並んで居るから自然斯る形態に発達したものであらう、それから根元は殆ど至る處に大小の穴が明いて居り、幹の内部は大部分洞穴となって外から這入れるやうになって居る、此洞穴は舊くから存在して居ったのであるが、明治二十八年十月に不明の火を發し午後七時より翌朝八時頃迄燃えたから洞穴の内面が一層大きくなったさうである、此火災に就ては樟腦を採取する為に故意に火を放ったとの説があるが不屈至極と言はねばならぬ、此樹には又地上一丈位の處に大きな瘤が多いのも面白い、此等の瘤は吉野川の洪水時に流木等が此樹に衝突して傷けられた為に出来たものと推察するのである、兎に角此樹は根本など既に老体をなし且つ上部の幹枝も段々枯れて居るやうであるから一層注意して保護を加へる価値がある、それから此樹の年齢に就いて憶測すれば他のものと比較して千年以下とするのが穩當であらう、又科学的方法として、樹幹の平均半径が八尺位である、樟の木材の年輪の間隔は普通一分乃至二分位であるが、老樹となれば発育が遅緩になり年輪も極めて細くなるから一分平均位と見るのが適當であらう、然らば八百年の樹齡となるのである、

先年徳島県の山林会で発行した「徳島県老樹名木誌」には地上五尺の周囲五十七尺とある、私の実測したものと僅か一尺の相違であるから県の技師が実測したものであらうが、樹高を十五間とし又樹齡を二千年としてあるのは甚だしい誇張である、尚ほ伝説として日本書紀安閑天皇の巻に板野郡矢上村云々と此樟の事を書いてあるやうに記してあるが、日本書紀の時代に郡や村がある筈はなく全く捏造の嘘の記事である、それから其次に湯蓋ノ森云々と言ふ事を書いてあるが、湯蓋ノ森とは福岡県の有名な宇美八幡宮の境地であつて矢上の樟とは何の関係もない、其他此書は不正確であまり宛にならぬが、元來が各町村からの報告を集めたものであるから一々咎める値打ちもないのである、次に本田（佐藤註：正しくは本多）静六博士の大日本老樹名木誌には、大樟の第十二席に此矢上のものが記載されていて地上五尺の周囲を四丈五尺としてある、是は却て實際より遙に少くなって居る間違である、私の実測通り五丈六尺とすれば全国中第八席に上る事となる、先般發表された内務省の史蹟名勝保存会で保存に決定した天然記念物の内には日本大一の鹿児島県蒲生の大樟を始め大樟が五箇所指定されておつたやうであるが、此矢上の樟の如きは其等に比して同等の価値のあるものである、

著者が丹念に樹の調査を行ったことが伺えるし、なるべく科学的に記そうとする態度が伝わってくる。その自信のためか他の資料について強い調子で批判している部分がある。『阿波名所図会』¹⁾において樹の太さを「十五圍」と表現していることに対して「昔の郷土学者は頭腦が粗雑であるのみならず国自慢觀念等から誇張性に富んで居ったから...」と痛烈に批判しているが、この指摘は的外れである。『阿波名所図会』¹⁾の作者は郷土学者ではないし、浪花の人であるからお国自慢があつたとも思われぬ。先にも述べたように同時期の他の史料⁴⁾も「十五かかえ」という表現をしており、一般にそう称されていたのをそのまま紹介した可能性がある。他にも『徳島県老樹名木誌』⁶⁾や『大日本老樹名木誌』¹¹⁾の数値や伝説の誤りを指摘しているが、これは先に述べた通りである。



図6 『阿波名勝 第一号』²⁾ の矢上の大クスの写真

明治二八年（1895）の火災の原因について、樟脳をとるために故意に火をつけたという説を紹介しているが、他の資料ではこの説は出てこない。また、その火災の影響と思われる樹勢の衰えを指摘して保護の必要性を説いている点にも調査における意識の高さが伺える。

樹齢についてクスノキの平均年輪幅を引用して800年としているが、生育環境等による個体差が大きいものなので、あてにはならない。

本書には樹の写真が掲載されている（図6）。樹の手前に男性が立っており、樹の股になっている所に子供が登っている。人を一緒に写すことにより、樹の大きさの見当が付き、また当時の服装が分かるので『阿波名所図会』¹⁾とともに大変貴重な資料である。もう一つ大事なことは、この写真が『阿波名所図会』¹⁾とほぼ同じ角度から撮影されていることである。これはおそらく意識して同じ角度から撮影したものであろう。図7a、bに両者の共通点を示した。1～4のコブや洞穴の位置が一致している。『阿波名所図会』¹⁾から『阿波名勝 第一号』²⁾には112年の時間が経っているが、著者も本文中で記しているように樹の様子があまり変わっていないことに驚かされる。同時に『阿波名所図会』¹⁾の著者が、かなり正確に樹の姿を描いていたということも分かる。このような過去の樹の姿の比較ができるのは、全国的にも珍しいのではないかと思う。さらに現在の樹の姿を同じ角度から撮影して、比較したのが図2 d、

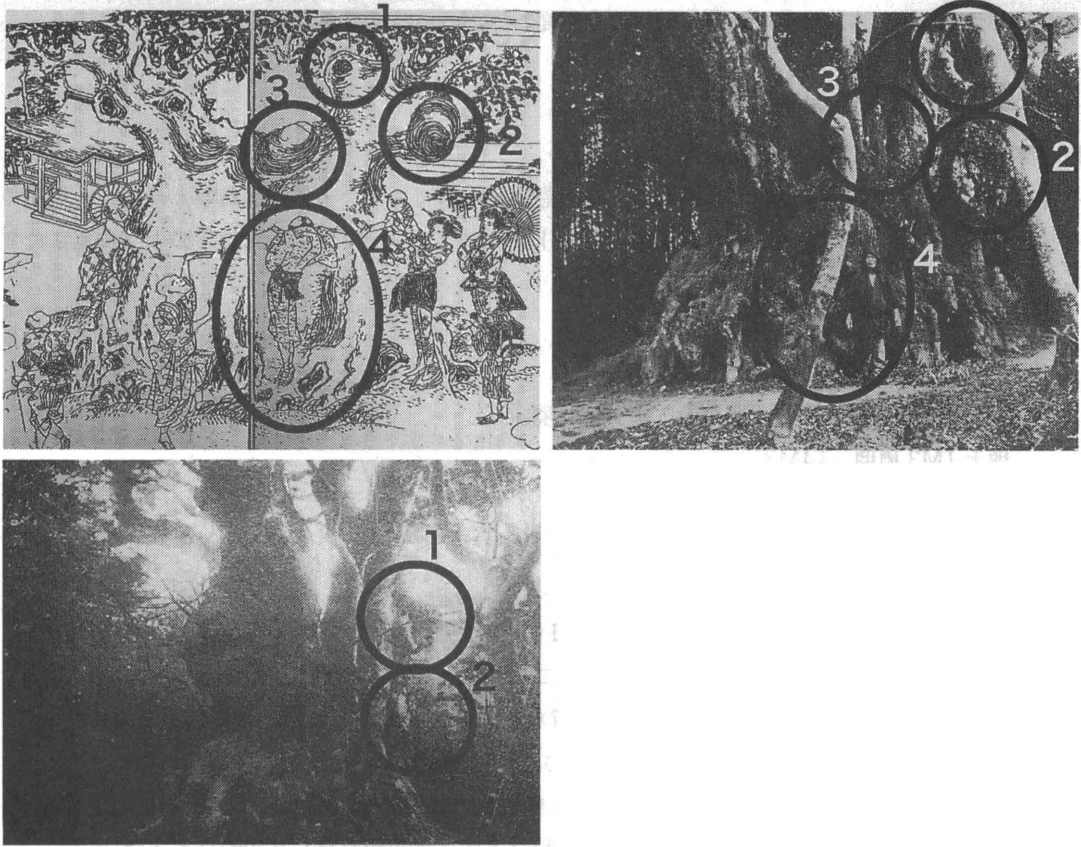


図7 『阿波名所図会』¹⁾(左上)、『阿波名勝 第一号』²⁾(右上)、『大日本老樹名木誌』¹¹⁾(下)の写真の対応関係

円で囲ったコブ状となっている枝の切断跡(1-3)と楕円で囲った洞穴状の部分(4)に対応関係がみられる。『阿波名所図会』¹⁾と『阿波名勝 第一号』²⁾はほぼ同角度であることが分かる。『大日本老樹名木誌』¹¹⁾は幹や大枝の様子からこれらとは別角度から撮影されているが、1と2のコブが同一であることが判別できる。

eである。現在の姿は『阿波名勝 第一号』²⁾が発行された83年前とは火事や台風による被災のために大きく変わってしまったが、楕円で示した幹に共通点が見られ、同一の幹であることが分かる。その内側の円で示した部分は、大正時代の写真では幹に大きな穴が空いているが、現在はこの穴がかなり塞がって小さくなっていることをはっきりと見てとることができる。また、この2つの写真において大クスの手前に写っている2本の樹は同一である可能性がある。

江戸時代の絵図『阿波名所図会』¹⁾には、春日神社の社殿と鳥居が描かれているが、それらも樹を描いた方角を判断する材料となる。樹、社殿、鳥居の3者の大きさや距離については、現在と異なっていて、これは絵の構図の都合上多少実際と変えて描いた可能性が高いが、おおまかな位置関係は現在と一緒である。ただし、社殿の向きは現在とほぼ90度ずれている。『阿波名所図会』¹⁾の作者が意図的に向

きをずらして描いたのか、後年の再建の際に向きが変わったのかは不明である。

昭和三年（1928） 『四国老樹名木誌』¹⁴

本書は四国営林局が編集・発行したもので、上下巻に分かれていて、上巻が徳島県と高知県、下巻が香川県と愛媛県の樹についてまとめられている。矢上の大クスについては上巻に以下のように記されている。

「(2) 矢上の大樟

所在地 板野郡住吉村大字矢上 春日神社境内

地上 1M3 周囲 14M3

樹高 27M

推定樹齢 2,000年

日本書記（原文ママ）安閑天皇の御巻に曰く「板野郡矢上に春日と云ふ地あり。春日大明神を祀れり。その社の辺に樟樹の廻り十二三間ばかりなる大木あり、（中略）古き樟木は是彼有れどもかかる大木は国内に有る所なし云々」八幡本記に曰く「御産所の側に生ひ茂る樟あり。其の下にて産湯を召させ給ふ、然るに其木大いに繁茂し枝葉殊に美麗、役人は是を名つけて湯蓋の森と云ふ。此樟今に存せり、其周囲十二間餘云々」とあり。往古より大木として伝えられたるを知るべし。幹の下部に大空洞を有し其空洞高さ 6M 周囲 13M あり数捨人を入るゝに足る。」

この本に書かれている記述は先の『徳島県老樹名木誌』（1914）⁶と良く似ている。違う点を挙げると、(1) 火事についての記述がない、(2) 樹のサイズについての数字が尺貫法ではなくメートル法で表されている、(3) 句読点や送り仮名が入れられている、(4) 『徳島県老樹名木誌』⁶では「後」となっている所が「役」となっている（原典である『粟の落穂』¹⁰では「後」）、(5) 幹周囲の測定が『徳島県老樹名木誌』が地上五尺（1.5 m）となっているが、ここでは地上 1.3 m となっており、そのせいであろうか幹周囲が小さい値となっている（『徳島県老樹名木誌』⁵では 17.3 m、ここでは 14.3 m）、という点である。しかし、日本書（紀）を日本書（記）としていたり、伝説を誤って紹介していることが共通しており、本書の記述は『徳島県老樹名木誌』⁶を踏襲しつつ少し書き直したものであろう。本書の編集は高知営林局であり、緒言には営林署や各村当局や篤志家から資料を提供してもらったことが述べられているので徳島県山林会（徳島県庁）発行の『徳島県老樹名木誌』⁶も当然のことながら資料となっていたことだろう。

なお、この本には大クスの写真も掲載されているが、それは図 4 で示した『大日本老樹名木誌』¹¹の写真と同一のものを使っている。ただし画質は相当落ちていた。

昭和四年（1929） 『徳島県史蹟名勝天然記念物調査報告 第一輯』¹⁶

本書は徳島県が調査・発行したもので、国がこの時期に各都道府県に号令をかけてこのような調査を行ったようで、各地で同様の報告書が作られている。なお、当時この樹は天然記念物に指定されていないため、天然記念物ではなく名勝として取り上げられたものと思われる。

大クスについて短い文章で次のように書かれている。

「本樹は村社春日神社本殿裏に在り。県下に於ける最大の老樹にして、地上一米半の周囲十七米突（五十六尺）、高さ二十五米突餘（十四間）、地上三米突半（凡そ二間）のところより大幹三に別れ、南北に並立す。巨幹の中央空洞をなし根元の周囲大小の空を生じ、出入することを得。明治二十八年十二月洞内火を発し、一部燃焼せり。樹勢年々衰弱しつゝあり。」

樹の幹周囲は大正時代の値とほぼ同じであるが、樹の高さは『阿波名勝 第一号』²⁾では九間としていたものが、本書では十四間と随分と大きい値となっている。本書は調査報告書であり、他の文献の引用ではなく実測したものあろうから、数年で五間も高さが増したことになる。樹勢のおとろえが指摘されているなかで、これだけ成長するとは考えられないので、いずれかの値が間違っていると思われる。大正期と昭和初期の他のデータを見ると『大日本老樹名木誌』¹¹⁾が九間としていて（同じデータを用いている「大日本老樹番附」¹²⁾も）、『徳島県老樹名木誌』⁶⁾、「徳島県老樹名木番附」⁷⁾、『阿波名勝案内』¹³⁾、『四国老樹名木誌』¹⁴⁾では十五間としている。ただし「徳島県老樹名木番附」⁷⁾、『阿波名勝案内』¹³⁾、『四国老樹名木誌』¹⁴⁾については『徳島県老樹名木誌』⁶⁾を踏襲しているだけと考えられるので、実際に樹高を測ったデータを抜き出すと九間、十間、十四間、十五間とするものがそれぞれ1つずつあることになる。これらの数値は年代順に大きくなっているわけではなく、先にも述べたが、これでは当時の樹高については正確な所は不明とする他はない。

本書では、樹の位置が本殿の裏と明記されていることが他の史料には見られない貴重な情報であり、この位置関係は現在も同じである。なお、火災の時期を12月としているが、他の史料では全て10月となっており、12月というのは間違いであろう。

昭和三五年（1960） 『阿波名木物語』¹⁸

著者の横山春陽は徳島新聞社の記者であり、本書は徳島新聞出版部から発行されている。趣味で県下の名木を訪ね歩いて伝説を調べていたものが高じて出版を思い立ったとある。新聞記者らしく、関係者に樹について語ってもらっているのをインタビュー形式で載せたりしている。また、付録として大正三年（1914）の徳島県山林会のデータ⁶⁾を載せ、それらの樹がどうなったか（枯死、伐採、被災により消失したものも多い）が記されている点でも貴重な資料である。

本書では矢上の大クスについて次のように書かれている。

「県下で最古、最大といわれる名木は板野郡藍住町矢上の大クス（樺）である。樹齢は

二千年といわれるだけあって阿波国名所図絵（佐藤註：正しくは『阿波名所図会』）にも載っており、古来大木として伝えられたことがわかる。

根元が大きなほら穴になっているのは、度々洪水にやられて腐りが入ったためだといわれている。そのほら穴の中は高さ五・四六メートル、周囲一三メートル余あって、十余人がはいられ、西側と東側に外部から体をかがめると出入りできる口があいている。明治二十八年十月原因不明の火を発生し、（周囲がウツソウと茂った林の中のほら穴だから、あまり人が近よらなかつたので、バクチ打ちたちが集まって丁半を争っていたのが火の始末が悪かつたためだろうとも、またこじぎが宿にして、たき火の不始末ではなかつたかともいう。）夜七時ごろから翌朝の八時ごろまで燃えつづけたので、内部の穴はいつそうひろがつたのだらうということで、幹は根元から三本に分れ、高さは二〇メートルほどある。

大正二年三月三日、東京農科大学造林学教室が編集発行した「大日本老樹番附」には東の方（闊葉樹）の前頭十四枚目に登載されており、この番付には、本県では本樹以外には何ものっていない。同三年県山林会の調査では地上五尺のまわり五丈七尺（一七メートル余）高さ十五間（二七メートル余）となっている。」

引用文献として『阿波名所図会』¹⁾、「大日本老樹番附」¹²⁾、徳島県県山林会の調査^{6)、7)}を紹介している。

本書では樹の写真も載っていて（画質が悪いため本論文には載せていない）、根元部分が瘤状、線状にうねった怪異な姿であることが分かる。残念ながら現在の樹の姿やの資料に写されている姿との一致点を見つけることができず、どの角度から撮影されたものか定かではないが、おそらく後年に台風で倒れて失われてしまった部分が写っていると思われる。

昭和四十年（1965年） 「藍住町史」¹⁷⁾、「増補 藍住町史」¹⁸⁾

「藍住町史」¹⁷⁾には矢上の大クスについて次のように書かれている。

「阿波志の春日祠の条に「予章あり囲六丈余（約二〇米）分かれて三幹となる、枝葉翳鬱す」とある。樹齢二千年と云われ、現在樹周二四米という大木の幹の下部に大空洞を有し、その空洞の高さ五・五米、周囲一三米もあり、数十人が入ることができ、県下最大最古の大木で、全国でも屈指の巨木といわれている。この空洞は明治二十八年十月不明の火を発生し午後七時から翌朝八時まで燃えた時の火事のためできたといわれる。昭和三十八年十二月十八日にも午後九時から翌日午前十時まで同種の火事があつた。昭和三十一年二月七日史跡勝瑞城跡と共に「天然記念物」として県教育委員会の指定を受けている。」

本書では樹に関する新しい情報が2つある。一つは昭和三十一年（1956）に県の天然記念物に指定さ

れたという点であり、もう一つは昭和三八年（1963）に火災にあったことである。しかし、これは誤りであり、後述するように火災が起きたのは実際は昭和三七年（1962）のことである。また、『阿波志』⁵⁾を引用しているのは、この資料が初めてである。

なお、幹の周囲を 24 m としているが、他の資料と比べて突出した数値であり、信じがたい。記入ミスか、あるいは測定の際に地上高 120～150 cm における周囲（胸高周囲や目通り周囲と呼ばれる）ではなく、地表部を測ったのであろうか。いずれにせよこのデータについては他の資料と同列に扱うことはできない。

『増補 藍住町史』¹⁶⁾は、『藍住町史』¹⁷⁾とほぼ同時に発行された増補版である。内容は『藍住町史』とまったく同じなので説明は省略する。

昭和四三年（1968） 「倒木後の写真」¹⁹⁾

昭和四三年（1968）9月28日に襲来した台風により樹の半分が倒れてしまったが、図8 aはその時の写真であり、倒れた幹が横倒しになっているのが分かる。この写真は春日神社の宮司である森内氏が保管されているものを許可を得て複製した。撮影日時や撮影者は不明である。

この写真と同じ角度から撮影したのが図8 bである。写真が撮られた後にも、安全対策や保護措置のためか、多くの枝が切り取られており、倒木直後の写真と現在の姿とは大きく違っている。従って、当時撮影した角度を判断するのに苦労したが、判断材料としたのは図8 c、dの○で示した部分の半球状のコブの存在である。倒木時には図8 cにおいて矢印で示した3本の枝が存在していたが、現在はなくなっている（図8 d）。このうち左下の矢印で示した枝については、現在の様子を示した図2の a の写真の左上部と b の写真の右上部に大きな枝を垂直方向に切断した跡が見えるが、この枝を切断したものと考えられる。

なお、倒れた幹は後日大阪から業者が来て買い取っていったそうである。

昭和五三年（1978） 「徳島県の文化財」²⁰⁾

徳島県教育委員会発行の本書には、矢上の大クスについて写真とともにかなり詳しい解説文がある。以下にその部分を引用する。

「矢上の大クスは古来名木として知られる県下の最長令樹で、藍住町春日神社の境内にある。その樹幹は、もと幹囲が一七・八メートルに達し、地上三メートルから大きく四つに分岐し、樹高は二五メートルで、下部には木肌に塊状のこぶが一面にみられた。樹齢は一二〇〇～一四〇〇年に及び、その樹姿は、如何にも高齢樹らしく、何ともおかし難い威厳と風格が感じられた。

しかし、その下部は、大きな空洞となり、内部は周一四メートルに及び、僅に人一〇数人を容れる程であった。したがって、よく浮浪人の住むところとなり、明治二十八年



図8 昭和四三年（1968）の台風による倒木時と現在の樹の比較

aは昭和四三年（1968）9月28日の台風で幹が倒れた直後の写真¹⁹⁾であり、前方に倒れた幹が横倒しになっている。bは平成十七年（2005）7月31日に同じ角度から撮影した写真である。c、dはa、bの一部をそれぞれ拡大したもので、○で囲った中に半球状のコブが共通点として認められる。cの矢印で示した枝はdでは存在せず、倒木後の保全のための措置であろうか、枝が大きく失われていることが分かる。

には、内部に火災が発生して傷つき、昭和三十七年十二月十八日にも、再び洞内に火災が起り、一三時間にわたってくすぶり続けたという。その結果、東南を始め、中央、東北の枝はほとんど枯死し、やっと西北の枝だけが、その生命を取りもどすに至った。

さらに昭和四十三年九月には、台風によって主幹の下半分が裂けて倒れ、その一部を除去するに至った。現在残る樹幹は、周囲が一・一メートルで、高さは一五メートルに過ぎないが、その後樹勢は回復し、県下最高の長寿木として、尚もその余命を誇っている。

本樹は、安閑天皇の頃「阿波国矢上村春日の樟樹」として記録せられたというが、その程は詳でない。大クスは、その永遠の生命を誇るかのように、幾多の風雪や災害に耐え、今日にその歴史を語り伝えている。

昭和四十三年十二月には、周囲にコンクリート枠を設け、土盛りなどによってその保護措置が講ぜられ、年老いた天下の名木の天寿の全きを期している。

昭和三十一年二月七日県指定（天然記念物）」

本書は樹の変化が他の資料に比べて詳しくかかれており、特に明治二八年（1895）の火災により失われた部分がどこか書かれている点が他の資料にはない特徴である。また、現在樹の周りは土盛りがなされていて、フェンスで囲われているが、それが昭和四三年（1968）の保護措置によりできあがったものであることが記されている。

本書に載っている大クスの写真は、現在の姿を写した図 2 c とほとんどそっくりであるので、本論文には転載せずに、若干の違いを以下に指摘するにとどめる。図 2 c において、中央部から出て左へ伸びる小枝が昭和四三年より若干太くなっている。また、樹の下部中央から右にかけては傷が塞がっていたり、全体的に盛り上がっていることが見てとれ、樹勢が順調に回復していることが分かる。ちなみに、本書の幹周囲は 12.1 m となっているが、我々の現在の調査では 12.9 m であり、若干太くなっている。この樹の形は複雑なため、幹の太さを測る場合、測る高さが少し変えると大きくずれてしまうので、80 cm の数値の違いがそのまま樹の成長を表しているとは必ずしも言えないが、写真で見る限りは樹の成長は間違いのないことである。

本文中の「本樹は、安閑天皇の頃「阿波国矢上村春日の樟樹」として記録せられたというが、その程は詳でない。」という箇所は、先に述べた『徳島県老樹名木誌』⁶⁾ の間違いを引きずっている。『日本書紀』と書いていないのは、『日本書紀』にそのような記述がないことを知りつつ、他の古い文献に載っている可能性を考慮したためであろう。しかし、安閑天皇の時代に本樹が記されたというのは、まったくの勘違いから生じたものである。

昭和五六年（1981）『徳島県神社誌』²¹⁾

『徳島県神社誌』²¹⁾の春日神社の項には由緒として以下のように記されている。

「往古の鎮座であって、名木「楠」は本社境内にある。古い文献に「板野郡矢上村に

春日と云う地ありて、その所に春日大明神を祀り、又社の辺に楠樹あり。廻り拾参間許なる大木あり。古き楠は是れ彼あれどかかる大木は此の御国内に有る所なし」と記されている。」

「古い文献」として紹介している部分は、『粟の落穂』¹⁰⁾とほぼ一致するが、明記しなかったのはこれを知らなかったのと考えられる。知っていれば次の挙げる部分のようにきちんと出典を明記したはずである。おそらく『徳島県老樹名木誌』⁶⁾以降広まった言い伝えの中から、はっきり誤っていると分かる部分を省いて記したのであろう。

さらに『徳島県神社誌』²⁰⁾からの引用を続ける。

「この楠は社殿の裏にあり「県指定天然記念物」であったが昭和四十三年（一九六八）九月の台風で倒れ現在は一部の幹から新芽を出している。なお「春日の鹿の墓」の伝説があり、毎年奈良の春日の神鹿が現れ、偶々その神鹿が死んだのでそれを葬った墓が社の近くにあるという。『阿波志』には「春日祠矢上村春日に在り、楠あり囲六丈余分れて三幹となる云々」と記され『寛保帳』にも「矢上村春日大明神宮坊矢上村山伏延寿院」と記載されている。」

樹については天然記念物であること、台風により倒れたこと、『阿波志』⁵⁾に記述が見られることが書かれている。

平成五年（1993） 「藍住町の文化財」²⁹⁾

藍住町教育委員会編集・発行の本書には、矢上の大クスについて次のように記されている。

「藍住町の天然記念物として、もっとも著名なものは矢上の大クスである。この物件については『阿波名所図会』にも紹介されているので、化政期には阿波一円に知れ渡っていたことと考えられる。樹齢などについてのデータは報告されていないので、詳細を知ることにはできないが、一説によると一、四〇〇年は越える（『徳島県の文化財』県教委刊）といわれ、県の天然記念物に指定されている。（中略）

何といても藍住町にはクスの大木が随所に見られる。前述の矢上の大クスについて『徳島県の文化財』では、「（佐藤註：『徳島県の文化財』と同じ文章なので省略。）」と記されている。」

このように『徳島県の文化財』²⁰⁾を踏まえた記述となっている。また、図として『阿波名所図会』¹⁾を載せている。

平成十二年(2000) 『日本歴史地名体系第三七巻 徳島県の地名』⁹⁾

本書の「春日神社」の項に「また大クスは「阿波志」に「有予章、囲六丈余分爲三幹、枝葉翳霽」とあり、県の天然記念物に指定されているが、昭和四三(一九六八)の台風で折れた。」とある。

本書で注目すべきは、樹についての記述よりも、むしろ寺の創建について書かれていることである。創建年代未詳としながらも「建仁三年(一二〇三)奈良春日社に寄進されて成立した矢上庄(矢上保)に鎮守として勧請されたとみられる。」とある。神社の創建時にもともと大クスが存在していたかどうか分からないが、もし創建を記念して本樹が植栽されたとすれば、現在樹齢約800年となる。

平成十二年(2000) 『「阿波名所図会」の研究』¹⁰⁾

本書は鳴門教育大学言語系国語教育講座による『阿波名所図会』¹¹⁾についての研究報告書であり、『阿波名所図会』¹¹⁾の成立及び各挿画について解説、読解している。矢上の大クスについても項を割かれているが、残念ながら大きな間違いが2つある。本書で春日神社の歴史として書かれているのは、本樹のある藍住町矢上の春日神社ではなく、徳島市眉山町大滝山の春日神社の歴史である。また、樹については「鳥居をくぐり、拝殿横を北に入ったところにフェンスで囲われた県指定の天然記念物である矢上の大楠があります。木は大きく二股に分かれ、中央に大きな窪みがあるところなど挿画と変わるところはありません。今では訪れる人も少なくなってしまった神社を、楠は昔と姿を変えることなくひっそりと見下ろしています。」とあり、絵図の描かれた当時と現在とで樹があまり姿を変えていないように書かれている。しかし、実際はこれまで述べてきたように、昔の面影を見つけるのが難しいほど大きく姿を変えてしまっているのである。

火事や台風による被災については記されていない。樹については他に「幹周りは一七・八メートル、樹齢一二〇〇年以上」としている。他に『徳島県神社誌』²¹⁾と同じく春日の鹿の伝説が紹介されている。

平成十六年(2004) 『阿波の巨樹巡り』²²⁾

とくしま森と緑の会編集・発行の本書には、矢上の大クスについて幹周囲13.32m、樹高11m、推定樹齢1200年とある。また、古記録として『阿波名所図会』¹¹⁾と『燈下録』⁴⁾を紹介しているが、これまで他の史料では気づかれずにいた『燈下録』⁴⁾を見いだしたことは価値が高い。

他に明治二八年(1895)と昭和三八年(1963)(実際には昭和三七年(1962))の火災や、昭和四三年(1968)の台風で被災について記されている。

4. 考察

4-1. 史料の成立年代について

以上、矢上の大クスの記録を年代順に紹介してきたが、これらを年表としてまとめたものを表1に示す。この樹に関する最も古い史料は、現在見つかった限りにおいて文化年代のものであり、当時す

で幹周囲 18 m 位の巨樹であったことが分かる。その後、樹は明治二八年 (1895) と昭和三七年 (1962) の大きな火災により燃え、昭和四三年 (1968) には台風により幹の半分が倒れるという大きな出来事があった。昭和三一年 (1956) には徳島県の天然記念物に指定され、また昭和四三年 (1968) の倒木後に保護措置が講じられている。

史料自体の変遷について見ると、文化八年 (1811) 以前のこの樹に関する史料がない。当時相当な巨樹であり、そのかなり以前から有名であったと考えられるので、新たな史料の発見に期待したい。一方で、文化八年 (1811) ～文化十二年 (1815) に『阿波名所図会』¹⁾『燈下録』⁴⁾『阿波志』⁵⁾があいついで成立している点が興味深い。この時期に郷土誌に対する関心の高まりがあったのだろうか。その後の約百年間に書かれたのは安政三年 (1856) の『粟の落穂』¹⁰⁾のみである。そして大正二年 (1913) ～昭和四年 (1929) にまた多くの史料が出現する。その中には公的機関による調査報告書に混じって地元の郷土誌愛好家による著作も 2 つ含まれており、当時このような調査を行う気運が高まっていたことがうかがえる。その背景には、明治期の近代化により開発や生物の乱獲が進んだことを憂慮して、明治四四年 (1911) に史蹟名勝天然記念物保存協会が創立され、講演会等の啓蒙活動や会報『史蹟名勝天然記念物』の刊行という活動を通じて自然保護や文化財保護そして郷土愛護の意識が高まっていったということがある。そして大正八年 (1919) には、天然記念物に関する最初の法律である史蹟名勝天然記念物保存法が公布された。本論文で紹介した昭和四年 (1929) 発行の『徳島県史蹟名勝天然記念物調査報告』¹⁴⁾はまさしくこの法律の制定を受けて作成されたものであろう。

これ以降、昭和三五年 (1960) まで史料は途絶えるが、その間は日本が徐々に戦時体制に入っており、さらに戦中、そして戦後しばらくの間はこのように目を向ける余裕が失われていた時代であったのかもしれない。

4-2. 火事は昭和三七年 (1962) か昭和三八年 (1963) か?

史料の中には、昭和期の樹の火災について、その年を昭和三七年 (1962) としているものと昭和三八年 (1963) としているものがそれぞれ複数ある。そこで、徳島県立図書館で保存されている新聞記事のマイクロフィルムを調べてみた。その結果、昭和三七年 (1962) 十二月十九日発行の徳島新聞の夕刊に、前日に春日神社のクスノキが燃えたことを記した記事が見つかった。さらに昭和三八年 (1963) の同時期についても調べてみたところ火災の記事は存在しなかった。従って火災が発生した年は昭和三七年 (1962) が正しい。

4-3. 樹齢について

巨樹について一般の人が最も関心を寄せるのが、その樹齢である。しかし、樹齢を特定できる巨樹はほとんどないのが実状である。巨樹を訪ねると大概推定樹齢〇〇〇年とか古い伝説が紹介されているが、これがあまり当てにならないものなのである。矢上の大クスも例外ではない。この樹の樹齢については、表 1 にあるように 800 年とするものから 2,000 年とするものまで、資料によってまちまちである。2,000 年とするものが多いが、これは大正三年 (1914) の『徳島県老樹名木誌』⁹⁾が初出であり、以来踏襲されて昭和四十年 (1965) の『藍住町史』¹⁷⁾『増補 藍住町史』¹⁸⁾まで続くが、2,000 年という数字について根拠が示されているものはない。おそらく『徳島県老樹名木誌』⁹⁾では誤った記述であるが応神天

皇がこの樹の下で産湯を使ったとしており、ここから 2,000 年という数字を出したのであろう。次に、昭和五三年（1978）の『徳島県の文化財』²¹⁾では新たな数値 1,200～1,400 年が提示され、以降の史料はこれに基づいた数字になっている。しかしこれもまた数字を算出した根拠はどこにも示されていない。あえて言うなら安閑天皇の時代（531～535 年）にこの樹があったという説をよりどころにすれば 1,470 年以上となり、『藍住町の文化財』²²⁾が樹齢 1,400 年以上としているのも同じ計算によるものかもしれない。しかし繰り返し述べてきたようにこの説もまったくの誤りである。史料中で唯一樹齢の根拠を示しているのは、大正十一年（1922）の『阿波名勝 第一号』²⁾においてクスノキの平均年輪幅からの計算による樹齢 800 年としているものであるが、実際にこの樹の年輪を測った訳ではなく、個体差があるものなので、その計算もあてにはならない。とすれば、樹齢に関するこれまでの数値はすべてあてにならないことになる。私見を述べれば、本論文で先に述べたように、神社の創建を建仁三年（1203）とする説をとり、その際に植えたとすれば樹齢 800 年となり、これは『阿波名勝 第一号』²⁾の樹齢（大正十一年（1922）に樹齢 800 年としているので、現在ではおよそ 880 年となる）とかけ離れた値ではない。よって樹齢 800 年というのを可能性の一つとして提案しておきたい。しかし、間違いのないように表すなら、最も古い史料である『阿波名所図会』¹⁾が成立した文化八年（1811）には相当な巨樹であったということから、樹齢は 200 年よりはかなり経っているという他ない。

では、現在生きている樹から樹齢に関する情報を引き出すことは可能であろうか。最も一般的で確実な方法は年輪を調べることであるが、樹の内部が空洞化し、古い部分が失われているため、この方法は適用できない。放射性同位元素等他の方法で樹齢を調べることも同様の理由で不可能だと思われる。もし可能性があるとするれば、昭和四三年（1968）の台風で倒れた幹がその後業者に引き取られたそうだが、その所在が分かって、かつ年輪が判別できる状態で保存されていれば樹齢を知る大きな手がかりになるが、その可能性は低いと言わざるをえない。従って、樹齢の推定は今後より古い史料を発見できるかどうかにかかっている。

5. 終わりに

人が巨樹に惹き付けられるのは、その大きさに圧倒されると同時に、樹が経てきた長い歳月に自然と想像力を刺激されるからである。人は樹の下に立ち止まって、遠い過去の人々も自分と同じようにこの樹を見上げたのだろうか、また遠い将来の人々も同じようにこの樹を見上げるのだろうかと考える。巨樹は過去と現在と未来の人々を繋ぐ貴重な存在である。従って巨樹と人との関わりを明らかにすること、巨樹を守り続けることは、同じ意味で重要なことである。しかし、今日の状況を見ると、巨樹を守るという点については、天然記念物に指定されているものであれば、その保護・保全が義務づけられているが、歴史を明らかにするという点においては、充分とは言えないものがほとんどである。樹の保護・保全が義務であるならば、樹の歴史を掘り起こしてそれを後世に伝えるのもまた義務であろう。

本研究は、他の樹の歴史について調べている際に、文化年代の『阿波名所図会』¹⁾と大正期の『阿波名勝 第一号』²⁾に同じ樹が描かれていること、そして両者に共通点が多いことを偶然見いだしたことから始まった。特に大正期の『阿波名勝 第一号』²⁾における樹の写真や解説は立派なもので、その価値は

『阿波名所図会』¹⁾と同等に貴重なものであるにも関わらず、現在ではまったく忘れ去られているということが残念であり、これを紹介する必要性を感じた。また、間違った解釈をされてきた『粟の落穂』¹⁰⁾についても埋もれたままにしておくことはできない。また、大正二年(1913)発行の「大日本名木番附」¹²⁾において東の前頭14枚目であることは『阿波名木物語』¹⁶⁾に記されているが、実物ほどのようなものか紹介されていないし、翌年に徳島県山林会が作成した「徳島県老樹名木番附」⁷⁾において東の横綱とされていることは今では知る人がいるかどうか疑問なほど忘れ去られてしまっている。さらに、昭和四三年(1968)の倒木直後の写真も樹の歴史を語るうえで貴重なものであるが、この写真を紹介するのは本論文がおそらく初めてではなかろうか。本論文が契機となり、矢上の大クスの歴史が、少しでも多くの人の知るところとなり関心を持っていただければ幸いである。

最後に樹の調査にあたり春日神社宮司森内舜二氏には、樹の説明、資料の提供、実地調査の許可等ご協力いただきましたことを感謝いたします。また、本研究は徳島大学共通教育の創成学習の一環として学生とともに行った。調査に協力してくれた井上直人、大賀秀範、白砂佑記、山根啓資、吉田将三、各氏に感謝いたします。

註

- 1) 探古室墨海『阿波名所図会』文化八年(1811)、文化十一年(1814)、弘化三年(1846)、昭和五四年(1979)版は歴史図書社発行。
- 2) 笠井高三郎「県下の最大老樹 矢上の大樟」(阿波名勝会編集発行『阿波名勝 第一号』、大正十一年(1922)、21-23頁)。
- 3) 平凡社地方資料センター『日本歴史地名大系第三七巻 徳島県の地名』平凡社、平成十二年(2000)、125頁。
- 4) 元木維然『燈下録 卷之一』、文化九年(1812)。
- 5) 藤原之憲『阿波志 卷之五』文化十二年(1815)(徳島県立図書館所蔵の平成三年(1991)版を参照した)。
- 6) 徳島県山林会『徳島県老樹名木誌』大正三年(1914)、39頁。
- 7) 徳島県山林会『徳島県老樹名木番附』大正三年(1914)。
- 8) 赤松万里、板東則子、溝口陽子、小林美帆、加藤正彦、森勇樹、棚上靖代、日吉淳、磯崎好則、鎌田政司、安宅加代子、森清隆、藤岡値衣、永田美代子、後藤美映子『『阿波名所図会』の研究』鳴門教育大学言語系(国語)教育講座 赤松研究室、平成十二年(2000)、2-11頁、46-49頁。
- 9) 新編阿波叢書編集委員会『新編阿波叢書 上巻』歴史図書社、昭和五一年(1976)、(『燈下録』における該当箇所は304頁、『粟の落穂』における該当部分は187-188頁)。
- 10) 野口年長『粟の落穂 一の巻』、安政三年(1856)。
- 11) 本多静六『大日本老樹名木誌』大日本山林会、大正二年(1913)、7-8頁。
- 12) 本多静六『大日本老樹番附』東京農科大学造林学教室、大正二年(1913)。
- 13) 石毛賢之助『阿波名勝案内』大正五年(1916)、208-209頁(明治四一年(1908)版には矢上の大クスの記述

はみられない。歴史図書社発行の昭和五四年（1979）版は大正五年版を再刊行したもの。これらは徳島県立図書館蔵）。

- 14) 高知営林局編集発行『四国老樹名木誌 上巻』、昭和三年（1928）、1頁。
- 15) 徳島県『徳島県史蹟名勝天然記念物調査報告 第一輯』昭和四年（1929）、60頁。
- 16) 横山春陽『阿波名木物語』徳島新聞出版部、昭和三五年（1960）、192-193頁。
- 17) 藍住町史編集委員会『藍住町史』徳島県板野郡藍住町役場、昭和四十年（1965）、68頁。
- 18) 藍住町史編集委員会『増補 藍住町史』藍住町役場、昭和四十年（1965）、68頁。
- 19) 倒木後の写真（春日神社宮司森内氏所蔵であり、撮影日時や撮影者、ネガの有無は不明）。
- 20) 徳島県教育委員会編集発行『徳島県の文化財』昭和五三年（1978）、285頁。
- 21) 徳島県神社庁編集発行『徳島県神社誌』昭和五六年（1981）、264-265頁。
- 22) 藍住町教育委員会編集発行『藍住町の文化財』平成五年（1993）、52-53頁。
- 23) とくしま森とみどりの会編集発行『阿波の巨樹巡り』平成十六年（2004）。

表 1 矢上の大クスの年表

出来事	史料名と成立年	樹の大きさや姿	樹齢	伝説	その他
建仁三年(1203)春日神社創建? ³⁾					
	文化八年(1811)、文化十一年(1814)、弘化三年(1846)『阿波名所図絵』 ¹⁾	阿太さ 15 抱え。			絵 (図 3)
	文化九年(1812)『燈下録』 ⁴⁾	太さ 15 抱え。	千年とも二千年とも考る所なし。		
	文化十二年(1815)『阿波志』 ⁵⁾	幹周囲は六丈余 (18 m 位)、幹は 3 つに分かれる。			
	安政三年(1856)『栗の落穂の巻』 ¹⁰⁾	一めぐり十二三間 (22~24 m)。徳島随一の大木である。			日本書紀安閑天皇時の春日部屯倉がこの地である可能性。八幡宮本紀に登場する宇美八幡宮のクスノキより大きい。
明治二八年(1895)10月、火事		もともとあった空洞が火事により拡がる。			
	大正二年(1913)『大日本老樹名木誌』 ¹¹⁾	幹周囲四丈五尺 (13.6 m)、高さ十間 (18.2 m)、20 人が入れる空洞あり。		なし	写真 (図 4)
	大正二年(1913)『大日本老樹番附』 ¹²⁾	幹周囲四丈五尺 (13.6 m)、高さ十間 (18.2 m)、20 人が入れる空洞あり。			日本の広葉樹の前身 14 枚目 (図 5)。
	大正三年(1914)『徳島県老樹名木誌』 ⁶⁾	地上五尺の幹周囲五十七尺(17.3 m)、樹高 15 間 (27.3 m)、数十人が入れる空洞あり。	2,000 年	日本書紀、八幡本記に記されているとす。	

表1 矢上の大クスの年表(続き)

出来事	史料名と成立年	樹の大きさや姿	樹齢	伝説	その他
	大正三年(1914)「徳島県老樹名木番附」 ⁷⁾	地上五尺の幹周囲五十七尺(17.3 m)、樹高15間(27.3 m)。	同上		徳島県の広葉樹の横綱(図5)。
	大正五年(1916)「阿波名勝案内」 ¹³⁾	同上	同上	日本書紀に記されているとする。	
	大正十一年(1922)「阿波名勝第一号」 ²⁾	幹の目通周囲五丈六尺(17.0 m)、高さ九間(16.4 m)位、幹は3つに分かれる、コブが多い。	800年	日本書紀、八幡本の記載の否定。	写真(図6)、樹の上部の樹勢が悪い。
	昭和三年(1928)「四国老樹名木誌」 ¹⁴⁾	地上高1.3 mの幹周囲14.3 m、樹高27 m、空洞の高さ6 m、周囲13 m。	2000年	日本書紀、八幡本に記されているとする	写真(『大日本老樹名木誌』 ¹¹⁾ と同じ)。
	昭和四年(1929)「徳島県史蹟名勝天然記念物調査報告 第一輯」 ¹⁵⁾	周囲17 m(五十六尺)、高さ25 m余(十四間)、地上3.5 m(凡そ二間)のところより大幹三つに別れて、南北に並立、空洞あり。			樹勢年々衰弱しつつある。
昭和三十一年(1956)、 県天然記念物に指定	昭和三十五年(1960)「阿波名木物語」 ¹⁶⁾	樹高20 m、幹は根元から三本に分れる、空洞の高さ5.46 m、周囲13 mで十数人が入れる。	2000年		写真
昭和三十七年(1962)12 月18日、火事	昭和四十三年(1965)「藍住町史」 ¹⁷⁾ 「増補 藍住町史」 ¹⁸⁾	幹周囲24 m、空洞の高さ5.5 m、周囲13 m。	2000年		

表 1 矢上の大クスの年表 (続き)

出来事	史料名と成立年	樹の大きさや姿	樹齢	伝説	その他
昭和四三年(1968)9月28日、台風により幹の一部が倒れる					
	撮影日時不明「倒木後の写真」 ¹⁹⁾				写真(図8)
昭和四三年(1968)12月、樹の周囲にコンクリート枠を設け、土盛りする					
	昭和五三年(1978)『徳島県文化財』 ²⁰⁾	幹周囲が12.1 m、樹高15 m。	1,200-1,400年	安閑天皇時代に樹があったとする説を紹介。 神社の創建を「往古」と表現。「春日の鹿の墓」の伝説の紹介。	写真。樹勢回復傾向。
	昭和五六年(1981)『徳島県神社誌』 ²¹⁾				
	平成五年(1993)『藍住町の文化財』 ²²⁾		1,400年以上		
	平成十二年(2000)『阿波名所図会』の研究』 ⁶⁾	幹は二股。	1,200年以上	「春日の鹿の墓」の伝説の紹介。	
	平成十六年(2004)『阿波の巨樹巡り』 ²³⁾	幹周囲13.32 m、樹高11 m。	1,200年		
	平成十七年(2005)本論文	幹周囲12.9 m、樹高12.8 m、太い幹の最高点まで9.6 m、空洞の開口部(幅135 cm、高さ150 cm)。	200年を大きく超える		『徳島県の文化財』 ²⁰⁾ 時から成長が認められる。